

「あらあら？ 何をしているのですか。服はまだ着てはダメ、ですよ？」

「試練には一糸まとわぬ姿で挑むのが条件ですので、そのまま裸でいきましょうね」

「寒くはないでしょう？ むしろ顔がとても赤いようなので、熱いくらいだと思うのですが……」

「ふふふ♪」

「ではそのまま、奥の祭壇まで進んで行きましょう……奥に四本のロウソクが見えるでしょう？」

「試練一つに付き、一本ずつロウソクを灯し、そのロウソクが尽きるまで……私たちが天使が課した試練に信徒くんたちが耐えることができれば合格、というものです」

「ええ、そうです」

「試練は四つあります、ロウソクをすべて消しきることができれば、見事使徒になれますよ」

「ふふふ……♪ 頑張っていきましょうね」

「私の見立てでは、キミには見どころがあると思っていますので……♪」

「では早速……第一の試練に挑みましょうか内容はとても簡単です」

「神への祈りの証明。」

「ロウソクが尽きるまで、キミは声を出してはいけません……これだけです。簡単でしょう？ ふふふ……♪」

「この部屋の中央で祭壇に向かって、膝をついたまま祈りを捧げるのです。動いたりしてはいけない、というわけではないので、少しの時間待ては終わりますよ」

「試練の内容は分かりましたか？」

「では……さっそく初めてみましょうか……さあ、キミの祈りを神に捧げるのです」

「……ふふふ」

「やはり、思っていた、通りです……♪ キミの祈る姿勢は、とても様になっていますね。きつと大人の言うことを素直に聞いて、ちゃんと形になるまで努力をしたのでしよう。そうでなければ、キミくらいの歳の子で、ここまで祈りの仕方が様になるということはないでしょうから……」

「キミ自身が信心深いことも影響しているのかもしれないですね……♪ いいことです……ふふふ」

「おっと、動いてはいいいですが……声を出すのは禁止ですからね？」

「試練は始まったばかりですよ？ 信徒くん……♪」
「ふふふ……体つきはとても華奢に見えますね……とても綺麗だと思いますよ……髪の毛の艶も……顔立ちも……肌艶も……透き通っているのに、イキイキとした活力に満ちているのが分かります……はぁ……ふう……ふふふふ……♪」
「これは試練の一環なので、声は上げずに私に身を任せるのです」
「ああ……♪ とつてもすべすべの肌なのですね……♪ ずっと触り心地を楽しんでいたと思うってしまう……♪ 指も、こんなにプニプニで……♪ 土仕事などしたことがないのがまる分かりですね……♪」

「ふふふ……♪ とつても……美味しそう……ちゅっ……ちゅっ……ちゅっ……んふっ……♪」
「そんなにビックリしなくてもいいではないですか♪ まだまだ序の口ですよ？ 指先を舐められたくらいで、驚いていては身が持たないと思いますし。それに……天使の体液には先ほど行った通り、祝福の加護が付与されています」

「これで、キミの体を舐め上げること、使徒へと近づくのも目的なのですから……ふふふ♪ 気持ちよくなってもいいかもしれませんよ？ 声を上げてはいけませんよ？ ちゅっ……♪」
「指、くらいでは、もう驚きませんか？ ふふふ♪ちゅっ、ちゅくっ、ちゅぶっ、ちゅるるっ、ちゅぼんっ……んっ、はぁ……♪」
「では、もう少し敏感なところを攻めていきましょう……♪」

「たとえば、うなじとかは、どうでしょう？ ふふふふ……♪」
「とても、いい匂いがしますねえ……ちゅっ……ちゅっ……ちゅるちゅるっ、ちゅぶっ……んっ……♪ はぁ、ふう……♪ゾクゾク、しますか？ くすぐりたいのですね……ふふふ♪」
「声は出してはいけませんよ？ 最後まで、耐えてください……ちゅっ、ちゅくっ、ちゅぶっ、ちゅるる、ちゅるる、ちゅうっ、ちゅぶあ……んはぁ……♪ はぁ、ふう……♪」

「じゃあ、次は……乳首を舐めてみましょうか……♪」
「はぁ、はぁ、はぁ……♪ とつても綺麗ですねえ♪ ちゅうっ、ちゅぶっ……んあっ……あらあら、逃げてはダメですよ♪ ちゅぶちゅぶっ、んんっ、ちゅくんっ、じゅるるっ、じゅぶりゅっ。ちゅろろっ、ちゅぶりゅっ、んんっ……はぁ、ふう……♪ ピンピンになっちやいましたね……♪」

「逆の方も、同じにしてあげないと……んふふっ……♪」
「ちゅるるっ、ちゅばっ、ちゅっばっ、ちゅぶりゅっ、んんっ……♪ ちゅううううっ、ちゅくんっ、ちゅぶちゅぶ、んんっ……♪ じゅぶりゅっ、んおっ……♪ ちゅっぶっ、ちゅくちゅむっ、んんっ……♪ むちゅむちゅっ、んあっ……♪」

「はあ、はあ、ふう……♪」

「頑張っていますねえ……♪　ここよりも、敏感なところといたらあ……ああ、そうだな」

「お尻の穴、なんていうのはどうでしょう？」

「あつ、ふふふっ♪　指で少し触れただけで、そんなに反応しちゃうんですね♪　大丈夫、大丈夫♪　そんなに力んだらダメですよ？　私の指でゆっくりと、ほぐしてあげますからねえ……♪　ふふふ」

「とつても、ヒクヒクしてますね……♪　緊張しているんですね？　でも、こうやってえ……んっ、ふう……ふふふ……少しずつ、入ってきてるの……分かりますよね？」

「大丈夫ですよお……ゆっくり、息を吐いてくださいねえ……♪　あつ、すごいですよ？　私の指の先、キュツキュツって締め付けてます……♪　ちゃんと、声我慢でいて、偉いですよ……♪　ちゅっ♪」

「少し、動かすだけで……ビクビクって体が跳ねちゃってるのに、声は出さないんですね♪　ああ♪　素敵♪　とつても可愛いですよ……信徒くん……♪　素直で、純朴で……ふふふ♪　そんなに可愛かったら……食べたくなっちゃいますねえ♪　ちゅっ♪」

「ここまで我慢できたんですもの……もうちよっとイケますよね？」

「ふふふ♪　キミのアナル、舐めてあげますねえ……♪」

「はあ、ふう……ふふふ……♪　ちゅっ♪　あらあら、緊張しなくていいのよ？　痛いことなんてないんですから……もっと力を抜いてくださいねえ。そうそう……そんな感じですよ……♪　ちゅっ、ちゅぶっ、ちゅるるるっ、んっ♪　ぬりゅっ、ぬじゅむりゅっ♪」

「じゅぶじゅりゅっ、じゅるるるっ、ぬじゅぶりゅっ……んっ！……♪」

「ふふふ、ああ……♪　声、我慢できなかった、ですねえ……♪」

「ロウソクは……？　ああ、とても惜しいです、あと指一本分くらいの幅で終わっていたのに……残念ですか……信徒くんの試練は失格、ということとで終わり、ですねえ……♪」

「……あら、あらあら……♪」

「落ち込んでしまったのですか？　ふふふ♪　そうですね……とても惜しかった、ですもの……信心深いキミがここで失格というのは、私も望んでいるわけではないのです……♪」

「ああ……では、こういう提案はどうでしょう？」

「特別ですよ？　キミの中の汚れを私のこの聖根、ふたなりチンポで浄化するというのを条件に、試練を続けることを許可しましょう」

「先ほどのお清めの儀式を少し思い出してください。体中に私のどろっどろの精液をぶっかけることで、祝福をしてあげましたよね？ あれは祝福の儀式としてはほんの序の口程度のものでいいです」

「ですので、今回は念入りに……キミの中に出すことでより深く強い祝福を届けてあげる必要があります」

「ふふふふふふ♪ 分からないですか？ ここですよ、ここ。先ほど念入りに刺激したこの穴ですよ♪」

「大丈夫、敏感ですがとてもいい感じの穴なので、痛いことはありませんよ？ さっきも声をあげてしまうほど感じていたのですから……きつとすてきな体験になると思います」

「どうですか？ このふたなりチンポを受け入れます、よね？」

「……ふふふふ♪ いい返事です♪」

「では、さっそく……入れてみましょうか……♪ 先ほど十分ほぐしましたし……受け入れることはできると思いますので……では、お尻をこちらに向けてくださいね……信徒くん……♪」

「はぁ……はぁ……ふう……♪ 怖いですか？ 大丈夫、大丈夫……♪ 私、自ら……すてきな体験にしてさしあげますから……♪」

「いきます……んっ、んんっ……っ！」

「ああ、いいっ……すごく、締めまりますねえ……んあっ♪ ゆっくりと、飲み込んで、いってますよお……♪ はぁ、はぁ、んあっ♪ あらあら、ダメですよ？ 声は我慢しなさいと言ったでしょうに」

「これはもっと中まで祝福してあげませんと……♪ ふふふふっ♪ どんどん、入っているのが、キミにも分かるでしょう？ ほらあ♪ ふたなりチンポが、ずぶずぶと、信徒くんの体の奥深くまで……入ってきていますよお……♪」

「ふふふっ♪ あんっ♪ 締め付けが、すごい、ですねえ……♪ はぁ、ふう……♪ ふたなりチンポを、受け入れるのです……♪ ふふふっ♪ アナタも分かるでしょう？ 体の中に、神聖で太くて、たくましいものが入ってきている感覚が こんなに美味しそうに締め付けてくるんですもの……んあっ♪ ふう……♪」

「とつても、素敵、ですよ……はぁ、んあっ……もうすぐ、全部、入りますからあ……んんんっ♪ はぁ、はぁ、ふふふ♪ 全部入ってしまったねえ♪ さすが信徒くんです……♪ 体の反応も素直で、素敵ですよ……ちゅっ♪」

「はぁ、はぁ、んんんっ♪」

「出し入れ、して、いくので……んあっ♪ たくさん感じなさい♪ んんっ♪ あっ、いいっ♪ すごく、締め付け、いいですよおっ♪ んんっ♪ んあっ♪ ふう、ふうっ、ふー……はう、んふっ……あん♡」

「ふふふ、ふふふふっ♪ 完全に、おちんぼを受け入れているのですね♪ 床に突っ伏しながら、突き上げられて、声が出ていますよ？ あらあら……♪ 本当に、可愛いですねえ♪ キミのおちんぼも、こんなに勃起しているじゃないですかあっ♪」

「もつと気持ちよくなりたいですよね？ だったら、キミ自身の手でシゴくのです♪ ほら、早く♪ ふふっ、ふふふっ♪ ああっ♪ いいっ♪ アナルが縮まっていますよお♪ アナル、犯されながらオナニーできるなんて、さすがじゃないですか♪」

「どうですか？ 気持ちいいですよね？ かわいい声、止まらないですもんね♪ ふふふ、ふふふふっ♪」

「ハア、ハア♡ ハアッ♡……くうっ！ ん♡ んふう♡！あっ、んっ♪ んんっ♪ ジュボジュボするたび、締め付けるの、すごくいいっ♪ 美味しく啜えこむの、上手うっ……♪ んんんっ♪」

「声、我慢できませんね♪ しょうがないですね♪ 気持ちいいの、止まらないですもんね♪ はあはあ……♪ だったら、仕方ないです♡」

「キミの奥の奥で私の神聖なザーメンをビュルルって射精してあげますねえ♡ 心の奥までしっかり浄化してさしあげます……♡ ふふふ、ふふふふふっ♡ アナル♡ 突かれて♡ んあっ♪ アンアン鳴いちやうんですね♡ ああ♡ 可愛いっ♡ 本当に素敵♡」

「我慢もできずに♡ んんっ♡ 自分でおちんぼシゴきながら、今からアナタは、イッチやうんですよお♡ よかったですねえ♡ んうっ♡ 気持ちいいの、止まらないですよえ♡ ふふふ♡ あっ、あんっー♡」

「いっばい、出してあげます♡ 喜んで受け取ってくださいねえ♡ ああ♡ もうっ♡ 出るっ♡ 出ますうっ♡ イクっ、イクっ……んんっ♡ イっちやうっ♡ んんんっ！ んんんんんんうううううっ……♡♡♡」

「はあ、はあ、ふう……ふふふふ♡ ちゃんと出せましたねえ♡ 偉いですよ、信徒くんっ♡ はあ……ふう……キミの体の中の奥に、どくどくって出てる、ザーメンの感触はどうですか？」

「気持ちよかったですよねえ？ ふふふふっ♡」

「ああ……こんなに、射精しちゃったんですねえ……あらあら……♡ ちゅくっ……んっ♪ すっく、濃い……ですね……♪ はあ、はあっ♡」

「精通、おめでどうございます……♡」

「ええ、ええ、これで信徒くんの中まで祝福がみたされました。とても素晴らしいことです、もちろん試験もつづけられますよ」

「よかったですね……信徒くん……ふふふ♪ちゅっ♡」